

『コンビニ人間』と ジェンダー規範

DR LAURA EMILY CLARK
昭和女子大学、2020

バックグラウンドと研究 テーマ

ジェンダーと村上春樹の小説

- ▶ 村上春樹の小説とジェンダーイメージ
 - ▶ 結婚・離婚・男女関係・男性の友情（ホモソーシャルリティ）
- ▶ ミチエル・フーコー
 - ▶ ディスクール（ディスコース）
 - ▶ 権力



方法論

- ▶ 社会学の視点から文学で社会の問題を垣間見える
- ▶ 談話分析・批判的言説分析
- ▶ (Fairclough 2010)

Why Murata?
Why 『コンビニ
人間』 ?

村田沙耶香 (b.1979)

- ▶ 2003 『授乳』：群像新人文学賞
 - ▶ 2009 『ギンイロノウタ』：野間文芸新人賞
 - ▶ 2013 『しろいろの街の、その骨を体温の』：三島由紀夫賞
 - ▶ 2016 『コンビニ人間』：芥川龍之介賞
-
- ▶ 『コンビニ人間』の日本国内での累計発行部数が102万部以上となっている
 - ▶ 英語翻訳版が60万以上となっている
 - ▶ (Shinbunka online, 2018)

“

『コンビニ人間』はとても奇妙な小説で、そしてコンビニという場所はとても日本的な場所だと思っていたので、その小説が日本でもたくさん読まれたことに驚きましたが、海外の方にも読んでいただけたことは本当に驚きでした。

”

(村田 2019)

Previous research/reviews

- ▶ 飯田 (2019) : 「やはりこの作で最も興味深いのは「正常」の抑圧性を鮮明過ぎるほど鮮明に浮き彫りにし、「社会」から完全に切り出された存在を描いた点である」
- ▶ 橋本 (2019): 「村田氏の作品には〈性描写〉、〈模倣〉、〈普通と異常〉など繰り返す類似したキーワードやモチーフが登場する」
- ▶ 村田裕和(2017) : 「常識」の暴力性や「～～らしさ」を強要する会社の不条理を...の視点から描きだす。」
- ▶ Rich (2019): “Sexuality and sexless relationships are a recurring preoccupation for Ms Murata”
- ▶ Waldman (2019): “Keiko embodies a demographic anxiety in Japan, which has been experiencing falling marriage rates and low birth rates for years”; choosing a different kind of conformity than the rest of society, which insists that she marry and pursue a conventional career path”
- ▶ Buritica Alzate (2019): 「『正常』の概念や社会的・文化的な『家族』『生殖』『セクシュアリティ』『結婚』というモデルを再考する可能性を開く」

「コンビニ人間」の登場人物

<コンビニ店員>

- ▶ 古倉恵子
- ▶ 泉
- ▶ 菅原
- ▶ 店長
- ▶ 白羽
- ▶ トアアン

<他の方>

- ▶ 恵子の家族
- ▶ 恵子の同級生
- ▶ 白羽の義姉

「普通」ってどう
いう意味？

社会的な側面から

「普通の人間」が社会的に作られている。

ジェンダー理論によると、日本社会は二元的なジェンダーシステムである。(Ueno 2018)

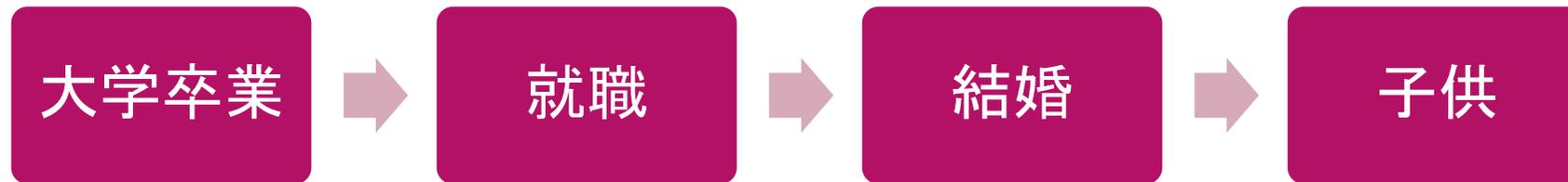
「男」と「女」の2つの性別に別れている状態で、性役割が構築される。そのため、社会で「当たり前」に捉えられているジェンダー・イメージを介して、性役割が継続する。

セックス vs ジェンダー

- ▶ セックス = 生物学での体の性別の捉え方
- ▶ ジェンダー = 社会学と文化における性別の捉え方
(Butler 1990)

「大人になる」と「ライフイベント」

- ▶ 大人になるの意味が「一連のライフイベントの流れ」として理解される



- ▶ ジェンダー化された社会には男女のイベントが違う。バブル経済時代の時に、
 - ▶ 男 = 「企業戦士」
 - ▶ 女 = 「主婦」 (Dasgupta 2015)
 - ▶ 「性別分業の結婚」

- ▶ 現実には70年代のデータによると、「性別分業の結婚」のピークに達したのに、結婚の37%しかそういう構成ではなかった (Osawa in Dalton and Dales 2016)
- ▶ バブル崩壊後 = 「失われた20年」 = 景気低迷や少子高齢化など問題
- ▶ 「性別分業の結婚」のイメージと日本人の現実生活が大きく分かれてきた (Dasupta 2015)
 - ▶ 共働き世帯

「普通の大人になる」：
恵子の場合

子供の時

- ▶ 飯田(2019)：恵子が「暗黙のうちに共有されている社会の規範を理解しない人物として登場する」
- ▶ 死んでいた小鳥・スコップの事件・先生のヒステリー状態
- ▶ 母親：「どうすれば『治る』のかしらね」
- ▶ 恵子：「必要なこと以外の言葉は喋らず、自分から行動しないように」
- ▶ 恵子：「私は『治らなくては』と思いながら、どんどん大人になっていった。」

大人になった恵子

- ▶ 大人になった恵子のアイデンティティーはコンビニでの仕事と完全に一体化していて、年を重ねるにつれて、そのことが多くの問題を引き起こしていく
- ▶ 恵子によると：家族は「だんだんと不安になったよう」だった

「フリーター問題」と常時雇用

- ▶ 二元的なジェンダーシステムの中で、男性が一人前社会人にならなくてはならないので、非正規雇用から常時雇用の従業員になるのが強いイメージである。
(Hidaka 2010)
- ▶ 女性の場合のイメージは、子供が学校教育に入る後で、非正規雇用で働く。
(Alexy 2019)
- ▶ 長期に非正規雇用で働くフリーターの社会的地位が低い。 (Cook 2016)

恵子のアイデンティティー

- ▶ 恵子にコンビニは<家族>や<友達>や<恋人>や<体の具合>などより、コンビニのほうが重要なことだと考えている。
- ▶ コンビニ店員のアイデンティティーが必要不可欠であることについて明らかになっていく。
- ▶ コンビニで働くことが、社会に入るとか、大人になるとか、「正常な人間にしている」とかができる。
 - ▶ 「世界の正常な部品」
- ▶ 恵子のアイデンティティーは「コンビニ店員」ということだ。

“doing gender”
ジェンダーをしている

ジェンダー規範が絶対的なものではない

- ▶ 絶対的なものにも関わらず、ジェンダー規範が従うべき規範と理解されている。
- ▶ West and Zimmerman (1987): “doing gender” 「ジェンダーをしている」
- ▶ 毎日の生活の中でも、服装や喋り方や動きなど、私たちはジェンダー規範に制限されている。

恵子の模倣・普通女性のマニュアル

- ▶ 「人間みたい」になりたがっているので、他の人を模倣する。
- ▶ 「普通の三十代女性」
- ▶ 「履いている靴の名前やロッカーの中のコートタグを見て**参考**にしている。一度だけ、バックルームに置きっぱなしになっていたポーチの中を覗き、化粧品の名前とブランドもメモした。」

“ 周りからは私が年相応のバッグを持ち、失礼でも他人行儀でもないちょうどいい距離感の喋り方をする「人間」に見えているのだろう。 ”

喋り方・声 (1)

- ▶ 恵子が喋り方について考える時に、模倣が見られる：
- ▶ 「菅原さんの喋り方をトレースし、少し語尾を大人向きに変えた口調で泉さんに答える。菅原さんはスタッカートをついたような、少し弾んだ喋り方をする。泉さんとは対照的な喋り方が、二つを織り交ぜながら喋ると不思議とちょうどいい。」

1)
誰の声を使う



2) 他の人の文章を
丸ごと繰り返す



3) 終助詞で誰の声
を見分ける

喋り方・声 (2)

- ▶ 社会言語学のTeraoとZimmerman(2000)の研究について菅原と泉の終助詞が「neutral」と「moderately masculine」と言われる。
- ▶ 小原(2014) : 現在「従来の女性文末詞..を使用して話す人を見かけることがほとんどない」
- ▶ 恵子 : 「ああ、私は今、上手に『人間』ができているんだ」

他の登場人物の模倣

- ▶ 誰もが友達に似てくる
 - ▶ 菅原について：「女の子たちは菅原さんと同じような服装と喋り方だった」
 - ▶ 妹について：「前より喋り方が落ち着いていて、洋装はモノトーンになっている。今、妹の周りにはこういう人がたくさんいるのかもしれない」
- ▶ 誰かが他の人の声になる
 - ▶ 店長と泉について「声のトーンは全く違うものの、店長も泉さんと同じように語尾を伸ばして喋る癖がる。」
- ▶ 恵子：「こうして伝染し合いながら、私たちは人間であることを保ち続けているの」

‘Gender
policing’
性別威压

会話で性別威圧

- ▶ ジェンダー研究の中で性別威圧という理論がある(Butler 1990)
- ▶ 性別規範の威圧のため、女性に社会が「女らしさ」に求める
- ▶ 大まかに分類すると、本作には二つの種類の性別威圧がある：
 - ▶ ジェンダーパフォーマンス (doing gender)
 - ▶ 妥当な大人になること関連している

ジェンダーパフォーマンス

- ▶ ユカリ：「前はもっと、天然っぽい喋り方じゃなかった？髪形のせいかな、雰囲気違って見える」
- ▶ 恵子：「異物になったときはこうして排除されるんだ」
- ▶ サツキも：「そういえば、服の感じはちょっと変わったかもねー？前はもっとナチュラルっぽかった気がする」
- ▶ ユカリとサツキから批判を受けて、恵子は「女らしさ」の求め方が間違っていたことに気づく。これが、性別威圧イベントの事象である。

妥当な大人になる (1)

- ▶ ユカリ：「まだ結婚とかしてないの？」
 - ▶ 「え、じゃあまさか、今もバイト？」
- ▶ サツキ：「あのさあ、恵子って恋愛ってしたことある？」
 - ▶ 「恵子からそういう話、そういえば聞いたことないなって」
- ▶ 恵子が「困惑した表情を浮かべながら、目配せをしている」に気づいた。

妥当な大人になる (2)

- ▶ ユカリの旦那：「結婚くらいした方がいい」「早いほうがいいでしょ」「手遅れになるしさ」
- ▶ ミホの旦那：「誰でもいいから相手見つけたら？女はいいよな」

Gender enters
the
convenience
store



コンビニの社会でジェンダーはない

- ▶ つまりに、ジェンダーアイデンティティーとセクシュアリティなどは持っていないように見られる。恵子の考えでは、コンビニの社会にはジェンダーがない。コンビニ店員しかいない。

- ▶ 「コンビニ店員にとって、いつも130円からあげ棒が100円のセールになるということより、店員と元店員のゴシップのほうが優先されるなんてありえないことだ。二人ともどうしてしまったのだろう。」
- ▶ 「皆、制服を着て同じように働いていても、前よりも店員ではない気がする。」
- ▶ 「店長の中で、私がコンビニ店員である以前に、人間のメスになってしまったという感覚だった。」

「コンビニ人間」

VS

“Convenience Store Woman”

どうもありがとうございました！

—

References

- ▶ Alexy, Allison. 2019. 'Introduction: The Stakes of Intimacy in Contemporary Japan', in Allison Alexy and Emma Cook (eds.) *Intimate Japan: Ethnographies of closeness and conflict*, University of Hawaii Press: Honolulu, 1-34.
- ▶ Britica Alzate, Juliana. 2020. 'A Conversation Between Sayaka Murata and Ginny Tapley Takemori: Gender, Literature and Translation', *Gender and Sexuality*, 15, 145-66.
- ▶ Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge: Oxon.
- ▶ Cook, Emma. 2016. 'Adulthood as Action: Changing meanings of adulthood for male part-time workers in contemporary Japan', *Asian Journal of Social Science*, 44, 317-37.
- ▶ Dasgupta, Romit. 2015. 'Re-imagining the 'post-bubble' family in Tokyo *Sonata and Hush!*', in Tomoko Aoyama, Laura Dales and Romit Dasgupta (eds) *Configurations of Family in Contemporary Japan*, Routledge: Oxon, 9-20.
- ▶ Fairclough, Norman. 2010. *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*. Pearson: UK.
- ▶ Gavrieli-Nuri, Dalie. 2011. 'Cultural approach to CDA', *Critical Discourse Studies*, 9(1), 77-85.
- ▶ 橋本夏希。2019。「村田沙耶香『コンビニ人間』論：「普通」と「異常」の間で」、フェリス女学院大学国文学会、53、46-60.
- ▶ Hidaka, Tomoko. 2010. *Salaryman Masculinity: Continuity and Change in Hegemonic Masculinity in Japan*. Brill: Leiden and Boston.
- ▶ 飯田祐子。2019。「村田沙耶香とジェンダー・クィア：「コンビニ人間」、「地球星人」、その他の創作」、*Juncture*、10、48-63.
- ▶ 村田沙耶香。2016。「コンビニ人間」。文芸春秋：東京。Kindle edition.
- ▶ 村田裕和。2017。「私たちは進化している」、*社会文学*、46、26-28.
- ▶ 小原千佳。2014。「話しことばの終助詞について：映画にみる女性文末詞」、*日本文学ノート*、49、18-29.
- ▶ Rich, Motoko. 2018. 'For Japanese Novelist Sayaka Murata, Odd Is the New Normal', *New York Times*, viewed online 8 June 2020, <https://www.nytimes.com/2018/06/11/books/japanese-novelist-sayaka-murata-convenience-store-woman.html>
- ▶ Shinbunka Online, '村田沙耶香『コンビニ人間』、100万部突破', viewed online 8 June 2020. <https://www.shinbunka.co.jp/news2018/10/181019-02.htm>
- ▶ 多賀太。2006。男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース。世界思想社：京都。
- ▶ Terao, Rumi and Erica Zimmerman. 2000. 'Converging toward the interlocutor: Sentence-final forms in Japanese conversations', *Word*, 51:1, 41-57.
- ▶ 上野千鶴子。2018。女ざらい：日本のミソジニー。朝日新聞出版：東京。
- ▶ West, Candace, & Zimmerman, Don H. 1987. 'Doing gender'. *Gender & Society*, 1, 125-151.